

# 沈黙

## 神の沈黙

岩手県立盛岡第一高等学校

一年

米内 陽香 よない ほんか

「主よ、あなたは何故、黙っておられるのです。あなたは何故いつも黙っておられるのですか。この言葉がこの本を読んでいるなかで、私の心に深く、そして最も強く刻まれている。信仰について深く考えたことがない私にとって、この本が伝えたいことを掴むのは難しいと、そう感じていた。だが、この本を読み終わった時、私の考えは大きく変わった。私はこの本を読み始めた時、日本人信徒達が信仰のために死んでいくのが理解できなかつた。しかし、自分の信じるもののために生涯をまっとうする姿に、私は感銘をうけるようになった。うになつていった。

「ほうで踏絵を踏んだキチジロのこと、人間の心の弱さを垣間見ているようで、読んでいる最中、嫌悪の思いが沸々とわいて

きた。しかし、最後にキチジローが告悔を求  
 めた場面でのロドリゴの言葉がとても印象強  
 く残っている。「強い者も弱い者もないのだ。  
 強い者より弱い者が苦しまなかったと誰が断  
 言できようか。この言葉で、私の考えは大きく  
 変わった。キチジローも殉教をした信徒達に  
 値するぐらい苦しんでいたのだと、そう気づ  
 いた。なぜ自分は殉教できないのか、自分は  
 弱き者なのだというキチジローの悩みは、相  
 当な苦しさをたたはせずだ。その苦しみに気づ  
 かず、嫌悪の感情さえ抱いていた自分がとて  
 も恥ずかしくなった。殉教していく者とそう  
 でない者。一見、全く違う生き方をし、強き  
 者と弱き者に見えるかもしれない。しかし味  
 わっている苦しみの大きさは、どちらも同じ  
 であり、決して区別することはいできないのだ  
 と、そう思った。そして、その苦しみに闘い  
 ながらも踏絵を踏んだキチジローは、ある意  
 味「強き者」なのかもしれない。神を裏切り  
 ながらも、強くふれない信仰があるキチジロ

ーは、本当の「信徒」なのだ。

この本のなかで、私が最も印象に残った場面がある。それは苦悩の末、ロドリゴが踏絵を踏むという場面である。その時、ロドリゴは神の声を聞く。「踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生れ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ。」この声は全く同じような棄教を経験しているフエレイラにも、自分が棄教しようとする瞬間その声は聞こえたのだろうか。私はフエレイ

ラにも同じような神の声が聞こえていたのだと思う。もし神の声が聞こえていなければフエレイラは殉教し、生きるという道は選ばなかったはずだ。「踏むがいい」という神の声か、フエレイラにあえて自分が苦しむ道を選ばせたのだと思う。

そもそもなぜ神は、最後の最後で沈黙を破ったのか。ロドリゴは、信徒達の死を目の当たりにした時、必死に神に祈ることしかできなかつた。しかし、ロドリゴにも棄教の瞬間

が追ってくる。ロドリゴが踏絵を踏めば、穴  
 吊りにされていゝる百姓を助けることが出来る。  
 祈るだけで何もできなかつたロドリゴへ、遂  
 に神が沈黙を破る。「踏むがいい」と。この  
 時、神が沈黙を破つたのは、祈るだけではない  
 けない、棄教するといふ自分自身の苦しみと  
 引き換えに信徒達を助けるのだという思いを  
 伝えたかつたからだと、私は思う。この「沈  
 黙」は、「神の真意を表す沈黙」なのだ。こ  
 の神の言葉を聞いて、今まで自分の命より大  
 切なぐらい信じてきた神を裏切るということ  
 は、ロドリゴにとつてそれは「死」を意味す  
 るのと同じだ。たと思ふ。それでも、自分の  
 苦しみを振り切つて、信徒達を助けたロドリ  
 ゴの姿に、感動せずにはいられなかつた。は  
 たからみれば、棄教した裏切り者とみえるか  
 もしれない。しかし、私には信徒達のために  
 自分を犠牲にする勇氣があつた英雄にしかみ  
 えなない。人間は誰しも、自分自身が苦しむ道  
 は選ひたがらない。私だつたら、ましてロド

リゴのように、死ぬまで屈辱をうけながら生きていくという道は決して選べなかつた。『死』という、楽な道へ突き進んでいった。『うたろう。神を信じろからこそ、信徒達を大切に思うからこそ、ロドリゴはあえて棄教という道を選んだのだ。』

今、世界各地では宗教の違いによる争いが後を絶たない。私は宗教に対する思い入れがあまりなかつたため、ニュースでその話題を聞くたびに、その争いに何の意味があるのだ

らうかとさえ思っていた。でもこの本を読んで、それぞれの宗教の神を思う気持ちは決して軽いものではなく、その宗教を信じる人の『命』そのものだということが、あらためて分かつた。世界の国々では、様々な宗教、考え方がある。自分とは異なる物を排除するのではなく、互いに理解しあい、共存していく社会をこれからつくる必要がある。だから私も将来、そのような社会の実現に向け、自分もその一翼を担うために頑張りたい。